

鈴木 明彦¹: 北海道石狩湾沿岸への腕足貝タテスジホオズキガイの漂着Akihiko SUZUKI¹: An articulate brachiopod, *Coptothyris grayi* (Davidson), washed ashore on the coast of Ishikari Bay, Hokkaido

タテスジホオズキガイ *Coptothyris grayi* (Davidson) は、有関節綱に属する腕足貝である。本種は日本列島周辺に広く分布しており (Hatai 1936; 馬渡 1992), 北海道の日本海側でも見られる種である (伊藤 1987; 鈴木 2006)。今回2008年秋に北海道石狩湾沿岸において、打ち上げられたタテスジホオズキガイを採集したので、その概要を報告する。

石狩湾は、日本海に面した石狩市から小樽市に位置する (図1)。この付近にはほぼ直線的な海岸線が連続し、典型的な外洋性の砂浜海岸である。その海岸部は、石狩湾の汀線に沿って、およそ幅20~50mで海浜が連なっている (鈴木 2003)。

2008年10月から11月にかけて、石狩湾沿岸の5地点の砂浜 (銭函浜, 大浜, 石狩浜, 知津狩浜及び無煙浜) で、それぞれ3回の野外調査を行なった。調査方法は低潮線に沿っておよそ100mを歩き、目につく生物遺骸をすべて採集した。採集遺骸は洗浄・乾燥の後、各動物門に分別し、同定を行なった。このうち腕足貝についての検討結果を報告する。

今回採集した腕足貝は、タテスジホオズキガイ1種であった。これらはいずれも片殻で、やや海が荒れた後、低潮線付近に散点的に打ち上げられていた。貝類 (軟体動物) では、コベルトフネガイ, ムラサキイガイ, アズマニシキ, ウバガイ, バカガイ, サクラガイなどが随伴していた。

タテスジホオズキガイ (図2) は、二枚貝のようであるが、非対称の腹殻と背殻からなる。殻はほぼ円形で、赤色から濃赤色を示す。殻表面には太い放射肋が走るため、殻縁は波形となる。殻表には細かい成長線が刻まれる。腹殻は膨らみが強いが、背殻は平坦である。殻頂孔は小さな円形をなす。最大殻長は38mmで、20mm前後の小型個体が多かった。

石狩湾沿岸のうち、多くのタテスジホオズキガイが見つかるのは、銭函浜, 大浜及び石狩浜で、一方石狩川河口より北側に位置する知津狩浜や無煙浜 (望来) では数個体が採集されたのみだった (図3)。本種は広範な地理分布を示すが、特に東北地方に多く (馬渡 1992), 北海道での記録は小樽以南 (岡田ほか 1971; 伊藤 1987) に限られる。このような分布パターンを考慮すると、石狩北部付近が本種の分布の北限の可能性があるが、道北沿岸地域のデータが不明なので今後の検討課題とする。

タテスジホオズキガイは、潮間帯から水深300mまで生息するとされている (馬渡 1992)。石狩湾沿岸では、多量の貝類を伴って打ち上げられるので、随伴する貝類に着目した (鈴木 2003)。コベルトフネガイ, ムラサキイガイ, アズマニシキな

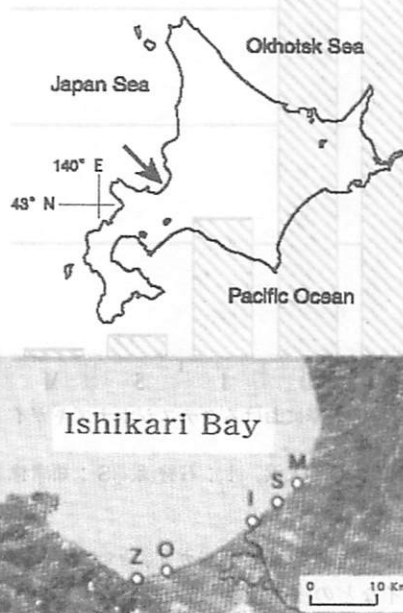


図1. 石狩湾沿岸における調査地点。

Z: 銭函浜, O: 大浜, I: 石狩浜, S: 知津狩浜, M: 無煙浜。

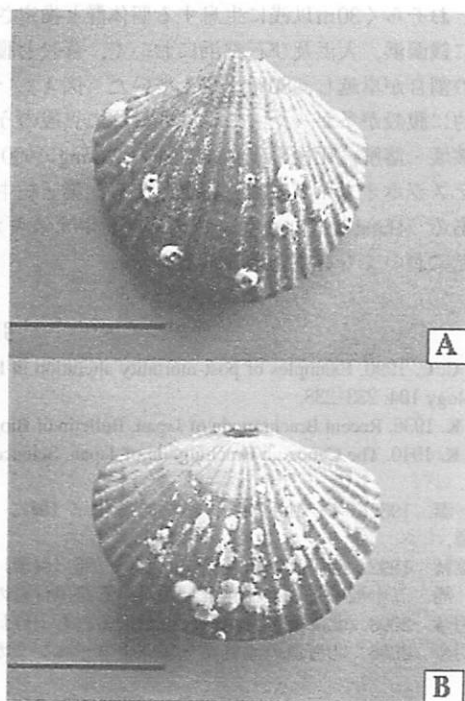


図2. タテスジホオズキガイ (石狩浜産)。

A. 腹殻面, B. 背殻面, スケールは20mm。

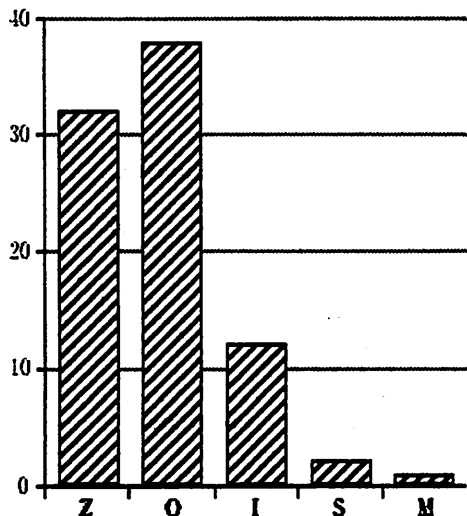


図3. 石狩湾沿岸におけるタテスジホオズキガイの漂着個体数。
Z: 鏡函浜, O: 大浜, I: 石狩浜, S: 知津村浜, M: 無煙浜。

どの表性・岩礫性種やウバガイ、バカガイ、サクラガイなどの浅埋没性・砂泥底種の存在から、底質としては礫混じりの砂泥底が推察される。またこれらの随伴貝類の生息深度は上部浅海帯

上部(潮下帯~20から30mまで)を指示している。以上のことから、今回打ち上げられたタテスジホオズキガイは、おそらく30m以浅に生息する個体群と推定される。

次に鏡函浜、大浜及び石狩浜において、背殻と腹殻との漂着比率を検討した。その結果、いずれの海岸でも腹殻の割合が卓越し、80%を超えていた(図4)。つまり本来ならば両殻の比率はおおよそ50%前後のはずだが、圧倒的に腹殻が多かった。これは非対称の貝殻のうち湾曲した腹殻が波浪で運ばれやすいこと、より丈夫な腹殻が破壊・溶解、死後の変質にも強い(Emig 1990)ことを示唆している。

タテスジホオズキガイは化石としても、第三紀中新世中期(約1500万年前)以降、東北日本でよく産出する種である(Hatai 1940)。今回のタテスジホオズキガイに関する漂着データは、化石標本の古生態解析や古環境復元においても有益と思われる。

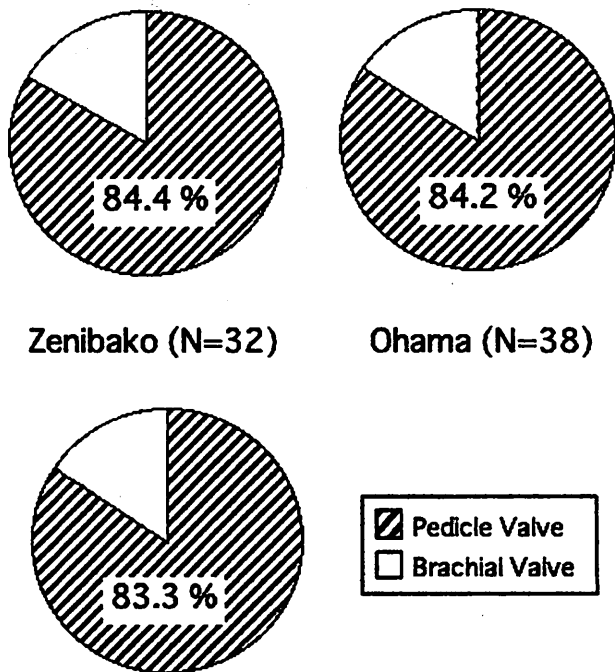


図4. タテスジホオズキガイの背殻と腹殻の漂着比率。

引用文献

- Emig, C. C. 1990. Examples of post-mortality alteration in Recent brachiopod shells and (paleo) ecological consequences. *Marine Ecology* 104: 233-238.
- Hatai, K. 1936. Recent Brachiopoda of Japan. *Bulletin of Biogeographical Society of Japan* 6: 63-70.
- Hatai, K. 1940. The Cenozoic Brachiopoda of Japan. *Science Reports of Tohoku Imperial University, 2nd Serise (Geology)* 20: 1-414.
- 伊藤 潔 1987. 7) 触手動物. 小樽市博物館(編). 小樽海岸の自然(海産)調査報告書. pp.35-36. 小樽市博物館, 小樽.
- 馬波峻輔 1992. 触手動物門腕足綱. 西村三郎(編著). 原色検索日本海岸動物図鑑 I, pp.221-226. 保育社, 大阪.
- 岡田 篤・五十嵐孝夫・小林喜雄 1971. 忍路湾付近の無脊椎動物及び魚類. *日本プランクトン学会誌* 18: 59-72.
- 鈴木明彦 2003. 北海道石狩湾沿岸における打ち上げ貝類. *漂着物学会誌* 1: 7-12.
- 鈴木明彦 2006. 北海道の漂着物ービーチコーミングガイドー. 130pp. 道新マイブック, 札幌.

(Received May 1, 2009; accepted June 19, 2009)

¹ 〒002-8502 札幌市北区あいの里5-3-1 北海道教育大学札幌校地学研究室

¹ Department of Earth Science, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education, Ainosato 5-3-1, Sapporo 002-8502, Japan